聖霊降臨後第7主日　特定11　A年　聖餐式・説教　　2017年7月23日

主よ　わが岩よ　わがあがない主よ　わが口のことば　わがこころのおもいをみ心にかなわしめたまえ　アーメン。

今日の福音書は、マタイによる福音書13章24節－30節、36節－43節であります。「毒麦のたとえ」と言われている箇所であり、このたとえ話は有名でよく知られているお話しです。しかし、このお話しはマタイによる福音書にしか記載されていません。そして、36節－43節はイエスの語ったたとえ話の解説であります。先主日の福音書「種を蒔く人のたとえ」でもたとえの解説がありました。たとえの解説があるたとえ話はまれであります。わざわざ「このたとえの意味はこうです」と説明しているのです。そこには、このたとえ話をちゃんと理解して欲しいという、強い思いがあるから説明しているのです。

36節－43節のたとえの解説は、イエスご自身がなされたのか、あるいは当時の信仰共同体(教会)の解釈なのか、という問題は残ります。しかし、少なくとも初代教会の人たちにとっては、イエスの語った24節－30節のたとえの中に大切な教えがあり、その教えは自分たちにとって福音（喜ばしい教え）であると思い、大切にして、言い伝えていた譬え話であることは確かであります。

イエスは、現在わたしたちが聖書を通して知ることのできる、たとえ話の数倍のたとえ話を語っていたと思われます。聖書にはその一部しか残されていません。たとえ話を聞かされた者が感動をし、心が動かされ、大切な教えだと思い共同体が言い伝えて(口伝)残していたものです。その残されたものの中から、福音記者が選び出し編集して、福音書に記載しているのです。今日は、そのことを思い、初代教会の人たちがこの「毒麦のたとえ」を通して、何を福音として受け止め、生きる力としていたかを、みなさんと探っていきたいと思います。

たとえ話は単純なお話しです。ある人が良い種を畑に蒔きます。すると、人が眠っている間に、敵が来て、毒麦を蒔いて行きます。ある程度、良い麦と毒麦が成長してきました。良い麦と毒麦は、成長しなければ見分けがつきません。僕（しもべ）たちは異変に気づきます。そこで、僕たちは主人に報告をします。すると、主人は「敵の仕業だ」と言います。僕たちは「一刻も早く毒麦を抜き取りましょう」と提案します。しかし、主人は「いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れのとき『まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい』」と言うのです。これが今日の福音書であります。

毒麦は農夫にとって頭痛の種でありました。毒麦はくきが長く「ほそむぎ」と呼ばれる雑草であります。なえが若い間は普通の麦とよく似ていて、ほとんど見分けがつきません。だんだん穂が出てくると、その違いが分かってくるのです。しかし、その時期になりますと、毒麦は根を広げる特徴がありますので、良い麦と毒麦の根が絡み合ってしまっています。毒麦を抜き取れば、良い麦の根まで抜き取ってしまうのです。穂が出てくると子どもでも良い麦か毒麦かの区別はつくそうですが、毒麦を抜き取ると、良い麦まで抜き取る危険がありますので、抜き取ることが出来ません。ですから、刈り入れのときまで、両方とも育つままに任せるのです。これが当時のパレスチナの農法でありました。

毒麦は毒を含んでいて、軽度ですが有毒です。食べるとめまい、吐き気、しびれを起こし、脱穀後、穀物に少しでも毒麦が入っていて、それを食べると苦くて、いやな味がするのです。毒麦は、良い麦と形や大きさは似ていますが、色が違っていて、石板(せきばん)色をしているのです。普通は脱穀後により分けるのですが、たとえでは、「刈り取りのときに束にして焼くように」、と言っていますので、束にするほど多くの毒麦があったことを意味しています。「敵の仕業だ」と主人が言っていますように悪意を持った仕業であったのです。ともかく、毒麦が良い麦と一緒にはえると、農夫たちは大変な迷惑をこうむるのです。

インドでは敵に対するおどし文句に「お前の畑に悪い種を蒔くぞ」ということばがあるそうです。パレスチナでもこうした嫌がらせが時々行われていたようです。悪意をもって他人の畑に毒麦を蒔くのです。イエスのたとえを聞いていた人たちの中には、毒麦を蒔かれた経験をした人を知っている者がいたかもしれませんし、自分もそのような経験していたかもしれません。ですから、イエスのたとえ話を興味深く聞いていました。毒麦が蒔かれたときイエスだったらどのように対応するのかを、興味を持って聞き入っていたと思われます。天の国のお話しですから、そこには何か特別な展開（毒麦の種を蒔いた人が裁かれるとか）があるかもしれないと、期待をもって聞いていたに違いないのです。

ところが、イエスの答えは、「いや、毒麦を集めるとき、良い麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れのとき『まず毒麦を集め、焼くために束にし、良い麦の方は集めて倉に入れなさい』」でありました。聞いていた人たちにとっては、少々期待外れであったのかも知れません。全く、一般の農夫が行う処理法だったからです。「なんだ、そんなことならば、みんなやっているよ。わたしだって、そのようにしたのだから」という思いだったからです。

でも、その当たり前なことの中に、神の真理があるということに気づかされ

たときに、「毒麦のたとえ」を聞いた人たちは感動をし、感謝をし、受け入れていったのです。その真理は「両方とも育つままにしときなさい」というイエスの姿勢です。これは神の姿勢でもあるのです。「刈り入れのときまで抜くな」ということは、一本でも多くの毒麦を炉の中に、投げ込むためだからではないのです。一本でも多くの良い麦を守り、失いたくないという姿勢なのです。

紀元 313 年、ローマで教会会議が開かれます。カルタゴの司教ドナトゥスが中心のドナトゥス派は「教会は常に聖でなければならない。一度キリスト教を棄て、戻って来た者が行うサクラメントは無効である。もう一度洗礼を受け直さなければならない。教会は聖なる人間の集まりであるから」と主張するのです。そのとき、アウグスティヌスは、「毒麦のたとえ」を引き合いに出し、「教会は正しい者ばかりの集団ではないし、中には間違いを犯した人もいる。それでいいのだ」と反論します。結果はアウグスティヌスの主張が受け入れられ、ドナトゥスの主張は受け入れられませんでした。教会会議は毒麦を抜き取ることをせず、麦も毒麦も両方とも育つままにすることの方を選択するのです。しかし、問題は残ります。ドナトゥス派が主張した「サクラメントの無効性」は、100 年近く議論されます。厳しい迫害に耐えた者とそうでなかった者がたくさんいたからです。ドナトゥス派の主張は、紀元 411 年のカルタゴ会議で否定され、ドナトゥス派は分派ではなく異端と宣告されるのです。一度、教会から去り、戻って来た司祭が行うサクラメントは有効か無効かの問題は、現在でも続いています。どちらが正しいかは、神の判断に委ねなければならないことなのです。それでも、その中ではっきりしていますことは、ドナトゥス派の主張は取り入れられなかったかもしれませんが、ドナトゥス派の主張があったから今の教会が成り立っているのです。異端とされた多くの人びとは、正しさを追求していく上で、いなくてはならなかった人たちであったのです。ドナトゥス派の人びとを毒麦として抜き取ったことによって、良い麦も抜き取られたのかもしれないのです。

「両方とも育つままにしておきなさい」ということは、毒麦にとっては救いにはならないのです。毒麦は毒麦だからです。育つままにされても最後は、毒麦として火に投げ込まれるだけだからです。毒麦を抜くことによって、根が絡み数本の良い麦が犠牲になるので、もったいないから「両方とも育つままにしときなさい」とイエスは言われたのでしょうか。確かに、一本でも犠牲になることは問題です。それは避けなければなりません。でも、そんなこせこせとした考えで「両方とも育つままにしておきなさい」と、イエスは言っているのでしょうか。わたしは、もっと違った考えで、イエスはおっしゃっていると思う

のです。

このことば＝「両方とも育つままにしておきなさい」は、イエスが語られたことばなのです。イエスは、わたしたちが住むこの世界においでになられました。この世でのイエスの使命は「罪の赦し」であります。確かに、毒麦は毒麦です。決して、毒麦は良い麦にはなりません。でも、それは人間が営む農業の話です。この「毒麦のたとえ」のお話しは、「天の国は次のようにたとえられる」という前置きがあってのお話しです。それは信仰のお話しです。「悔い改めることによって罪は赦される」という世界の中でのお話しなのです。そのように考えますと、火の中に投げ入れられるはずの毒麦が、良い麦として倉の中に入れられる可能性はあるのです。神の農法は、毒麦を見つけるとすぐに抜き取ることをせず、良い麦も毒麦も育つままに見守るやり方である、とイエスはたとえを通して語っておられるのです。そこには、毒麦が悔い改め良い麦に変わる可能性があるからと言われるのです。ですから、このイエスの農法は、わたしたちにとっては、本当にありがたいことであって、福音なのであります。

もし、神という主人が、僕（しもべ）たちの提案の「では、行って毒麦を抜き集めておきましょうか」に、「そのようにしなさい」と言われたならば、わたしはとうの昔に抜き取られ火の中に投げ入れられているのです。しかし、神という主人はそういう方ではありません。神は終わりの日(刈り入れのとき)まで待たれておられるのです。すべての人が悔い改め、救いの赦しにあずかり、良い麦として倉に入ることを望んでおられるのです。神は「行って毒麦を抜き取りましょう」ということに対して、がんとして「駄目です」とおっしゃる方なのです。神は、わたしたち一人ひとりが、毒麦から良い麦になることを待っておられるのです。あのイスラエルの民が神から離れても、神のもとに帰ってくることを待ち続けた神、放蕩息子が帰ってくると喜んで迎えた父親、そのような神の姿勢に感謝をしながら、生きて行かなければならないのです。

わたしたちは、その神の姿勢を知ったならば、わたしたちは早急に結論を出し、「あなたは毒麦だ」と抜き取ることは出来ないのです。忍耐と寛容をもって周りの人と関わっていかなければならないのです。